

トンコリの戦後史2

—1977年～1998年まで—

北原次郎太

はじめに

本稿は『社会文化科学研究』第7号に掲載した拙稿「トンコリの戦後史—1945年～1977年を中心に—」(以下、前稿と略す)の続編である。前稿ではトンコリの製作者・演奏者の動向を基準に、1945年から現在までを3つの時代に区分した。本稿で対象とするのは、このうち第2期(1977～1990)と第3期(1990～現在)に相当する時期である。

ここで、本研究の目的を改めて記せば、博物館・個人等が所蔵する物質資料、文献・新聞資料、インタビューによる情報をもとに、1945年以降のトンコリ製作・演奏の普及の経緯と、そうした活動に影響を与えた諸要因に注意を払うことにより、現在の普及状況および、トンコリが多くのアイヌに「伝統楽器」として意識されるに至った過程を明らかにすることである。これは同時に、今後のトンコリ研究の焦点を見定めるための基礎作業でもある。

本論の構成及び図について

本稿では、前稿と同じく、はじめに各時代の背景と特色をのべ、次に個々の製作者・演奏者の活動について時代を追って述べていくという構成をとる。

前稿ではトンコリを対象とした研究活動に関して、独立した章を立てて取り上げた。これは第1期においては製作・演奏者と調査者が明確に分離でき、かつ相互干渉的な関係にあったことを重視したためである。しかし、第2期以降にはこうした調査はほとんど見られない。かわって、製作者や演奏者が自らの実践の一環として、それ以前の研究の蓄積を参照し、その成果をまとめるという状況が顕著になってきた。従って本稿では、第2期以降の研究活動は個々の製作・演奏者に関する記述の部分にまとめ、独立した章を設けていない。

文中に掲載している図について、前稿では「見取り図」としたが、本稿では「模式図」に改めた。前稿及び本稿執筆にあたり、文中で触れたトンコリについては可能な限り実見するよう心がけたが、時間的な制約から、いわゆる実測図の作成は困難であった。従って前稿では写真を模写した図を用い、本稿では主として写真をトレースした図を用いている。また、各図の精度も均一ではない。前稿の尾沢氏、金谷氏らの作品や、本稿中の青山氏、秋辺氏、加納氏らの作品については調査が不十分であったり、鮮明な写真を入手できなかったために、正確さの点で難がある。これらについては、作品の情報を厳密に提示するというよりも、製作者間の参照関係や、全体における大まかな位置を示すため、特徴的な部分をピックアップして比較することに重点を置いた図である。本稿で述べる内容を視覚的に補うものという程度に考えていただきたい。

1. 第2期の活動と時代背景(1977年～1990年)

第2期の活動を担ったのは金谷フサ氏や白川八重子氏、あるいは金谷栄二郎氏など、いずれも第1期の終盤以降にトンコリの製作・演奏を開始した人々である。

この世代の樺太アイヌは、アイヌ語や旧来のアイヌ文化が次第に価値を喪失し、代わりに新たな文物が周囲を取り巻いていく状況で成長した。従って、第2期にアイヌの芸能を行う、あるいは工芸作品を製作するといった活動に参加した人々は、和楽器や民謡、和裁等を先に身につけていた場合が多い。彼等はそうした技術を、調査や芸能公演に参加することを通じて上の世代から学び、新たに「伝統文化」を獲得していった。

やがて、上の世代が高齢化し、指導を受けることが難しくなると、「上から学ぶ」活動は「学んだものを保存する」活動へと変化する。70年代に金谷氏らを取り上げた新聞記事には、第1期には見られない「保存」や「受け継ぐ」といった言葉が目立つ。また、筆者が金谷栄二郎氏を訪ねた際にも、「婆(藤山ハル氏のこと)の言

うとおりにした」という言葉で、前代との同一性を強調する場面が多かったことを記憶している。そして、こうした「伝統」認識は、より過去の、即ちより「純粋な伝統文化」への志向を生んでいったと思われる。

また、過去を探る手段として、直接的な伝達に代わり、近代以降の研究の蓄積、或いは近世の史料を参照する方法が中心になってくる。このような文化へのアプローチの方法は、それまではもっぱら研究者がとっていたものであった。第2期以降の製作者・演奏者は、この点で研究者と極めて似た姿勢を取るようになる。

第2期以降は、トンコリの製作が拡大し、製作者間に縦・横のつながりが形成されてゆくが、その際に金谷栄二郎氏が果たした役割は大きい¹。第1期の製作者は、活動が始まった時期に既に高齢だったこと、演奏はあまり行わなかったこと、製作も散発的だったことから、製作者同士のつながり、あるいは後進の育成ということが起こらなかった。これに対し、金谷氏は恒常的に活動に参加し、トンコリも精力的に製作するばかりでなく、自身が演奏をも行った。また、活動を組織化し、普及を意識したこと、人々のつながりができ始め、金谷氏の指導を受ける形で製作が広まるという現象が起こった。

1986年に金谷フサ氏が急逝すると金谷栄二郎氏たちの活動も緩やかに終息に向かう。1990年の「北方民族フェスティバル」参加のほかは目立った動きが見られなくなることから、この年をもって第2期の終焉とする。

1-1. ウイルタ協会と常呂町樺太アイヌ文化保存会

第1期の演奏者、藤山ハル氏が急逝してまもなく、網走市である運動が起こった。藤山氏とも親交のあった網走歴史協会の田中了氏が、ウイルタをはじめとする北方民族を取り巻く諸問題について取り上げたのである。

終戦によって樺太がソ連領となったことにより、樺太アイヌが北海道へ移住した経緯については前稿で触れたが、網走市周辺には、同じように移住したニヴフやウイルタも生活していた。彼らと、藤山氏ら樺太アイヌのグループは、観光用の祭りへの参加や、民芸品製作などで行動をともにする場面が多く、同じ樺太出身の少数民族同士ということもあって親交を深めていた。田中氏がウイルタ支援の運動を起こすと、樺太アイヌもこれに協力し、そのことがやがて樺太アイヌ自身の運動を活性化することになる。以下、当時の様子を田中氏の記述をもとに、略述する²。

田中氏は、1974年8月の「第二十一回北海道歴史教育者協議会網走集会」で「オロッコの人権と文化」³と題する特別報告を行って以降、多くの場でウイルタの現状等について報告した。これを受け、教育関係者や北海道内のアイヌが作る諸団体、一般の市民の間でウイルタへの関心が高まった。田中氏の運動は、1975年7月の、ウイルタの人権擁護や、民族文化についての知識普及を目的とした「オロッコの人権と文化を守る会」(以下、「守る会」)結成へとつながる。「守る会」結成当初の活動は北川ゲンダヌ氏に対する軍人恩給の支給を国に要請することに主眼があった。同年11月にゲンダヌ氏の父、北川ゴルゴロ氏が北海道文化財保護功労賞を受賞すると、その受賞祝賀会の場で「守る会」のもう一つの大きな事業「オロッコ会館(仮称)」建設の構想が発表された。会館設置の目的は「オロッコ族の貴重な文化を保存、継承発展させる」ことにあり、展示施設というよりは祭礼や工芸品製作を行うスペースとして構想されていたようである。「守る会」は会館建設の請願書を網走市議会に提出し、半年ほど審議されたが、予算不足等を理由に実現には至らなかった。一方、金谷栄二郎・フサ夫妻やヤイユーカラアイヌ民族学会の山本多助氏らから会館設置に協力の申し出

¹金谷氏自身は1960年代の半ばから、トンコリを製作していた。詳細は前稿2-7参照。

²主に参照したのは「□ オロッコの人権と文化―「守る会」運動と今後の課題」(1976年『アイヌ・オロッコの問題と教育』所収)と「北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニのあゆみ」(『北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集[改訂版]』所収)である。より詳しい経緯についてはこれらを参照されたい。

³当時、田中氏はウイルタについて言及する際、文献等で一般的であるという理由からオロッコという呼称を用いていた。

があり、ウイльтаだけでなく樺太アイヌ文化の紹介も盛り込むなど会館の構想も変化していった。「オロッコ会館」は「北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ」へ、「守る会」はウイльта協会へと改称し、自力での建設を目指して全国で募金活動が展開された。また、北川氏は職を辞し、資料館開館にむけて展示品の製作に着手した。金谷夫妻も、樺太アイヌに関する多数の展示品を製作・提供した。資料館の起工式、開館式には一家で参加し、金谷栄二郎氏は副館長に就任した。こうした中で資料館は1978年6月に着工し、8月に開館した。

田中氏の記述からは、北川氏が、自らの手で作る「自文化を展示する施設」に期待と情熱を膨らませていたことがうかがえる。そして、北川氏の高揚感、協力者である金谷夫妻にも伝わっていったと思われる。資料館開館の翌年には、トンコリの演奏を収録したレコードを発売し、各地で演奏会を行う(年表参照)。また、1981年頃には、私設の「樺太アイヌ研究室」を開設⁴、1984年には常呂町郷土研究同好会の分科会から独立する形で、常呂町樺太アイヌ文化保存会が設立される[常呂町樺太アイヌ文化研究会 1996:8]。

東京大学北海文化研究常呂実習施設に赴任した宇田川洋氏が活動に加わると、金谷氏のトンコリ製作にも新しい要素が加わった。根緒や肩の形式、鏡板に施す模様などが大きく変わる。これは博物館の収蔵品や、近世の史料に描かれたトンコリの図を参照した結果である。こうした経緯を経て金谷・宇田川スタイルとも言うべきものが形成された。1983年に網走市立郷土博物館で「トンコリ製作講習会」を開いて以降の約10年間、金谷氏と宇田川氏は度々製作講習を行った。現在製作されているトンコリの多くは、常呂町で生まれた新旧2つのタイプを原型とし、このような活動によって普及したのである。

1-2. 日本民俗舞踊研究会の調査

1975年6月に文化財保護法が改正されたことを背景として、北海道内各地のアイヌ古式舞踊を無形民俗文化財に指定する動きが起こった。同年に、釧路の春採と阿寒の舞踊が「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択され、調査が行われると、北海道ウタリ協会は改めて北海道内各地の舞踊を再調査するよう要望を出し、文化庁による調査が行われるにいたった[本田 2000:317]。これに呼応して、各地で次々と舞踊保存団体が設立され、調査を招致するという状況がうまれた。

調査は1975年から開始され、数次にわたって白老、網走、阿寒、春採、浦河、上川、旭川、帯広、静内、弟子屈、常呂などの各団体の芸能が調査された[本田 2000:317]。これをうけ、文化財保護審議会は、旭川、白老、平取、静内、浦河、帯広、春採、阿寒の8市町にある保存会のアイヌ古式舞踊を国の重要無形民俗文化財として指定するよう答申し、1984年1月21日、8保存会及び北海道アイヌ古式舞踊連合保存会⁵の舞踊が文部省告示第12号で重要無形民俗文化財に指定された。さらに、この指定に触発されて各地の保存会活動が活発化し、1990年から3年間にわたって未指定団体を対象に調査がおこなわれ、1994年には、札幌、千歳、鷗川、門別、新冠、三石、様似、弟子屈、白糠の9団体も指定を受けている。

常呂町での調査は1984年～1985年と、1992年の2次にわたって行われた。第2次の調査は聞き取りのみで、成果報告は行われていない。第1次の調査を担当した日本民俗舞踊研究会は「文化財国庫補助事業」として文化庁の助成を受け、日本国内の民俗舞踊の記録・調査活動を行っており、1982年から1987年にかけてはアイヌの舞踊を調査対象としていた。代表は須藤武子氏、北海道内における調査の中心となったのは進藤貴美子氏である。以下、同研究会の報告書『カラフトアイヌ古式舞踊』(以下、報告書)をもとに、常呂

⁴ 1981年4月12日の読売新聞掲載記事による。「樺太アイヌ研究室」開設の正確な時期は不明だが、これ以前の記事にその名称が現れないことを考えると、この記事の掲載からそれほどさかのぼらない時期であろう。

⁵ 1983年12月、8市町にある保存会の連合体として設立された。

での調査の概要をしるす。

同研究会は、1982年から北海道内のアイヌの芸能調査を開始した。常呂町が調査の候補に挙げられた背景には民俗芸能の研究者である本田安次氏の意向があったようである。また、当時はB.ピウスツキが残した蠟管レコードに録音されていた樺太アイヌの歌謡等が再生され、樺太アイヌの芸能に対する関心が高まっていたことも理由の一つであろう。1984年4月に、北海道庁文化課が進藤貴美子氏あてに常呂町での調査を依頼し、調査が実施された。

事業名は「民俗舞踊現地習得 日本民俗舞踊の技法(8)」、事業内容は「国指定選択等の民俗芸能の中から、日本民俗舞踊の技法のうち、踊りの発生原型を保つ踊り(北海道在住樺太アイヌの踊り)を選んで、現地へ行き、現地の保存会会員から舞踊の手ほどきを受けて習得し、それを芸能技法の普遍的な観点から、舞踊譜として記録し、保存する」というものである。調査は、1984年5月26日～28日と1985年2月7日～11日の2度にわたって常呂町多目的研修センターおよびファミリースポーツセンターで行われ、舞踊譜作成のほか、ビデオと写真による記録が行われた。「記録対象者」は金谷フサ氏とされているが、舞踊には他に数名が参加している。協力者、協力機関としては常呂樺太アイヌ文化保存会のほか、常呂町教育委員会社会教育課、北海道教育庁社会教育部文化課、北海道教育庁網走教育局指導課、北海道大学言語文化部(当時)村崎恭子氏があがっている。

2. 第2期の製作者

2-1. 千家盛雄氏(1940～)

千家盛雄氏は阿寒湖畔で民芸品店を営んでいる。各地の博物館等に展示されているトンコリを見るうちに、史料に基づいたトンコリの復元を思い立ったという。翻刻された『蝦夷嶋奇観』⁶を購入し、そこに描かれた図を参照しながら1980年頃に第1作を製作し、以後数本を製作している。1988年頃、旭川の川村兼一氏が千家氏のもとを訪ねた際に、千家氏のトンコリを1本譲り受けて持ち帰った。このトンコリはその後加納沖氏の手へ渡り、現在も加納氏が使用している。また、千葉県市川市の市川芸術学院にも千家氏の作品が収蔵されている(図1)。これは同学院学院長の斉藤勇氏が1980年代に購入したもので、学院内に設置している「小さな楽器博物館」に展示されている。千家氏によれば、これは第2作目であるという。

千家氏の作品は、他の製作者の作品に比べて胴の幅が広く、厚みもあるため重量が増すが、音量は豊かである。材にはイチイを用い、心臓は入れていない。肩は丸く、首はまっすぐに作る。首の側面に丸ノミのようなもので細かなスジ彫りをしている。頭部は丸くし、両側が薄くなるように作る。首および頭部に彫刻を施す。耳は握りの部分を幅広く扁平にし、彫刻を施す。

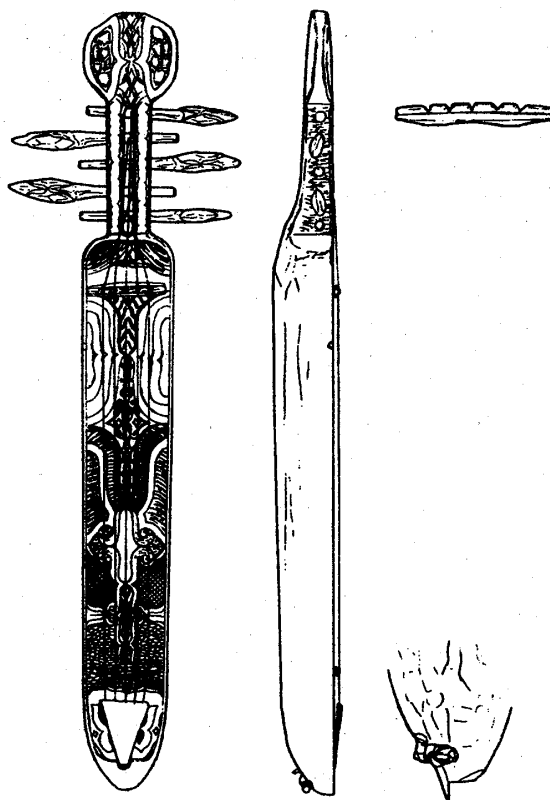


図1 千家氏のトンコリ
市川芸術学院所蔵
L113cmW12.3cmH7.5cm

⁶ 雄峰社が1982年に刊行した翻刻か。同書の研究・解説は谷澤尚一氏と佐々木利和氏。

右に3本、左に2本配置し、耳の中ほどに穴をあけて弦を通す。鏡板は長円形にし、胴の縁を同じ形に彫ってはめ込む。ボンドで貼り付け、木釘等は使用していない。鏡板の全面に彫刻を施す。糸枕の形状は図を参照。へそは括弧紋を2つ組み合わせた長円形で、かなり大きい。弦にはクラシックギターのものを用いている。これは斎藤氏が購入後に張りなおした可能性がある。根緒には牛革を用い、菱形に切り抜いたものを中央で折り曲げ、胴の下端付近にあけた穴に先端をとおして裏に出して木片に結ぶ。胴の背部には木片がぐらつかないように窪みをつけている。根緒の上端(折り曲げた部分)には灰色の配線コードを通し、これに弦を結び付けている。

2-2. 遠山長吉氏(1927~1989)

遠山長吉氏は浦河町の出身である。以下、遠山長吉氏についての記述は特に断らない限り、夫人である遠山サキ氏から伺った話によるものである。遠山氏は、旭川市や阿寒湖畔で民芸品の製作技術を身につけ、季節的に観光業に従事していた。同じ浦河町出身の鷺谷サト氏が常呂町を訪れた際にトンコリを譲り受けた事を契機とし、そのトンコリを模倣する形で製作を開始したという。鷺谷氏が譲り受けたというトンコリは、常呂という場所から考えて金谷氏の作品であったと思われる⁷。

遠山氏は、北海道ウタリ協会が主催する「北海道アイヌ伝統工芸展」にトンコリを出品し、入賞した経験を持つ。同協会本部が作成している歴代入賞者リスト(未公開)によれば、遠山氏は1983年(第15回)と1984年(第16回)の2回にわたり、伝統部門で優秀賞を受賞している。

遠山氏の作品は、阿寒湖畔の民芸品店に遠山氏の作品と思われるものが数点ある⁸ほか、弟子屈町のアイヌ民俗資料館、同アイヌチセに1点ずつ収蔵されているということである[金谷・宇田川 1986:46]。弟子屈町の2点は1971年頃に寄贈されたということであるが、遠山氏がトンコリを製作するようになった経緯を考えると、これでは早過ぎるように思われる。先述の「北海道アイヌ伝統工芸展」における受賞の時期を考えれば、おそらく1980年前後の製作・寄贈ではないだろうか。

遠山氏の作品については調査不足のため、あまり詳しく触れることができない。金谷・宇田川氏が写真で示した遠山氏の作品には、以下のような特徴が見られる。肩は平らで、頭部は丸い。耳は5本で、配置は一定しないようである。握りの部分が一旦太くなってから、末端へ向かってすぼまる形に作る。頭部、首、胴の表面に彫刻を施している。へそは菱形に作る。根緒には皮革を用い、胴の下端付近にあけた穴を通して後ろへ出しているようである。胴部下端は水平に切断されている。

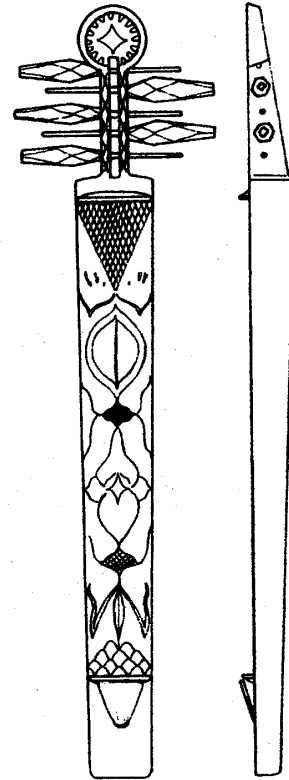


図2 遠山氏のトンコリ

[金谷・宇田川 1986]の写真による模式図。

弟子屈町アイヌ民族資料館所蔵

L94cm W10.8cm H4.2cm

⁷鷺谷氏が常呂町を訪れた年代は不明であるが、恐らくは先述のウイльта協会設立の時期、すなわち1978年前後ではないだろうか。鷺谷氏は1976年7月に余市町で行われた北海道歴史教育者協議会全道集会で北川氏と同席している[田中・ゲンダーヌ 1978:270]。おそらく、これ以後交友が始まったものと思われる。

⁸筆者が1997年に実見したところによる。

遠山氏の作品は、頭部の形状や彫刻など、全体に金谷氏の影響が感じられるが、特に特徴的なのは耳と胴部下端の形状である。この部分は遠山氏の創意によるものであるという。

2-3. 杉村満氏(1928~2001)

杉村満氏は尾沢カンシャトク氏⁹の子息である。従って、杉村氏のトンコリ製作は尾沢氏からの影響を多く受けていると思われるが、博物館等の収蔵品も参照しているということである¹⁰。

杉村氏の作品は丸瀬布町資料館や国立民族学博物館の収蔵品¹¹、個人蔵のもの、旭川周辺の民芸品店に並べられているもの¹²など多数残されており、筆者は正確な数の把握にいたっていない。ここでは、千葉伸彦氏の所蔵品 2 点を紹介する。以下に記す製作の経緯等の付随情報は 2003 年に筆者が千葉氏から教示を受けたものである。なお、「杉村 I」などの資料名は調査時に筆者が便宜的に付したものである。

杉村 I

この作品は完成後、「川村アイヌ記念館」に展示されていたが、杉村氏の作品中でももっとも音がよく、杉村氏は度々自宅に持ち帰って音を楽しんだという。千葉氏は川村兼一氏から購入した。

頭部裏の書き込み(杉村氏からの聴取をもとに千葉氏が記入)によれば、製作年代は 1980 年頃であり、胴と鏡板にはともにカツラを用い、糸巻にはアカダモを用いている。本体の成形や彫刻は杉村氏が行ったが、へそ(共鳴孔)と根緒は川村兼一氏が後に作り足したものだという。

肩は平らに作るが、首の幅が広い段差程度のものである。首(糸蔵)は頭部に近い方が広がり、中ほどに窪みをつける。頭は中ほどが窪んだ五角形で、表面は大きく半円状に凹ませ、線刻を施している。頭部裏には杉村氏の刻印(図 3 右上)を刻む。耳(糸巻き)は向かって右に 3 本、左に 2 本配置され、耳の中央に穴を開けて弦を通してある。耳の末端(握って回す部分)は断面が四角形で 4 面全てに 5 つの刻み目をつける。千葉氏が杉村氏に確認したところ、これも杉村氏が用いる刻印であるという。先端(首に差し込む方)は断面が丸い。購入当初は耳と穴の噛み合わせが甘いために弦が固定できず、その対策として耳の先端に紙を巻きつけてあったという。その後、千葉氏が楽器工房に依頼して耳を再加工したと

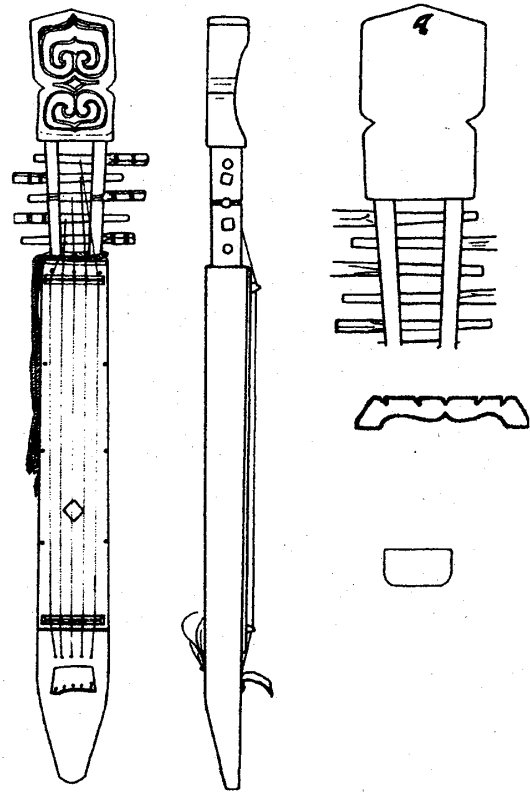


図 3 杉村氏のトンコリ I 千葉伸彦氏所蔵
L106cm W10.5cm

⁹ 尾沢カンシャトク氏については前稿 2-6 を参照。

¹⁰ 川村兼一氏によると、杉村氏は「函館の博物館のトンコリを見て作った。」といていたことがあるという。

¹¹ 丸瀬布町資料館に杉村氏の作品があることは金谷・宇田川氏の記述によった。国立民族学博物館の収蔵品は標本番号 35044。

¹² 筆者が 1997 年に実見したところによる。

いうことである。弦は千葉氏が張ったもので、ギター用のナイロン弦を用い、右から太・細・太・細・太の順に張られている。糸枕は、以前はボンドで固定していたらしく、鏡板に痕跡が残っている。現在の糸枕は千葉氏の依頼によって杉村氏が作り直したもので、断面が三角形で透かし彫りがある。鏡板は 10 本の洋釘で固定し、釘の頭に砥粉のようなものを塗っている。鏡板の上端と下端には面取りを施している。へそは完成後に川村兼一氏が開けたものである。根緒の部分には獣皮を 3 本の木ねじで止めているが、これは川村氏がつけたものである。杉村氏は、胴の根緒にあたる部分に 5 つの穴を開け、弦を 1 本ずつ通して、裏面で木片に縛って固定している。

全体の形状や根緒の形式は、青山俊生氏の報告に現れるトンコリに大変よく似ている¹³。

杉村Ⅱ

千葉氏が杉村Ⅰを購入後、再度製作を依頼したことにより製作されたものである。購入は 1991 年 10 月であるから、これ以前の製作と考えられる。頭部裏の書き込みによれば、本体にはトドマツ、鏡板はイチイ、糸巻きにはカエデを使い、頭部と鏡板の彫刻は川村兼一氏が施したものであるという。肩は平らに作るが、首の幅が広い段差程度のものである。首（糸蔵）の上下(肩と頭に接する部分)に前後から窪みをつける。頭部は中ほどが窪んだ五角形で、表面に浮きぼりがある。頭部裏には杉村氏の刻印を刻む。耳（糸巻き）は向かって右に 2 本、左に 3 本配置されている。耳の末端(握って回す部分)は断面が四角形で 4 面全てに 3 つの刻み目をつける。千葉氏が杉村氏に確認したところ、これも杉村氏が用いる刻印であるという。先端(首に差し込む方)は断面が丸い。先端部は千葉氏が楽器工房に依頼して再加工したものである。弦は千葉氏が張ったもので、ギター用のナイロン弦を用い、右から細・太・細・太・太の順に張られている。糸枕は上下で形が違い、上についているものは断面が三角形で、透かし彫りのないもの、下は千葉氏の

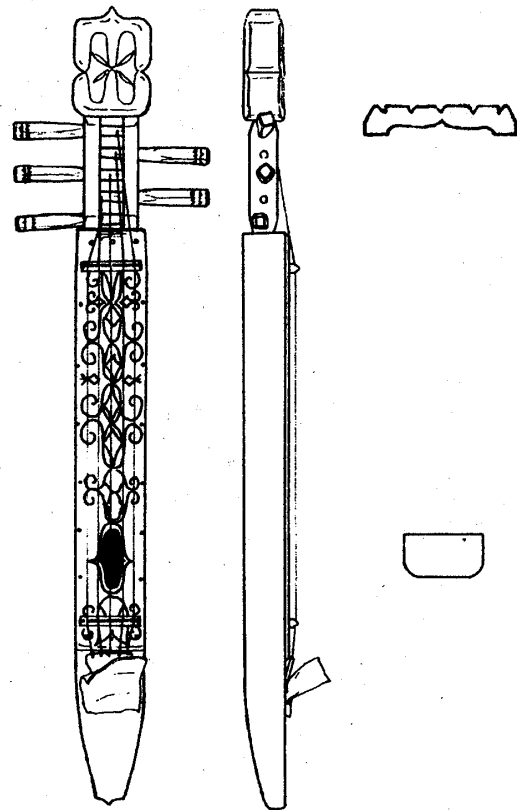


図4 杉村氏のトンコリⅡ 千葉伸彦氏所蔵
L114cm W10.2cm H6.15cm

依頼によって杉村氏が作り直したものである。鏡板は 18 本の木釘で固定している。へそは完成後に川村兼一氏が開けたもので、形は千家氏の作品に似る。根緒は革を 2 枚重ねて洋釘で固定し、革の上端に穴を 5 箇所開けて弦を結び付けている。更に上からアザラシの毛皮を貼り付けている。

千葉氏が所蔵するもう一点(杉村Ⅲ)や、国立民族学博物館の収蔵品は杉村Ⅱとほぼ同形であり、これが杉村氏の作品の典型を示しているといつてよい。これらの作品には、直線的なシルエットや首につける窪みなど、一部においては尾沢氏の影響が見られるが、全体的な印象はかなり異なっている。また、新しいもの(杉村

¹³ このトンコリは札幌在住の豊川重雄氏が所蔵しているもので、北海道で製作されたものだという [青山 1986 : 76]。

II)と古いもの(杉村 I)では根緒に用いる方式が異なる。新しい作品に用いられている方式は、戦前に収集された資料に見られる方式に近いものである。また、洋釘を用いた部分は見えないように工夫をし、新しい作品には木釘を用いる割合が増している。これは、製作時に選択できる技術のうち、より古いと考えられるものを用いたり、工業製品の使用を避けるという意図があったと解釈できる。こうした博物館資料にもとづく考察と、尾沢氏の影響を折衷する形で杉村 II が生まれたのであろう。この特徴は川村兼一氏や加納沖氏にも受け継がれている。

2-4. 藤谷憲幸氏(1947~)

藤谷憲幸氏は旭川市に生まれ、二風谷に移り住む。民芸品の製作・販売に従事し、企業組合二風谷民芸の代表理事である。藤谷氏の製作技術は萱野茂氏から学んだものである。藤谷氏に伺ったところでは、萱野氏の作品を模刻するかたちで、1980年頃から製作を開始したということである。製作に際し、萱野氏から「通常の木彫品ではなく楽器とであることを意識するように」と指示を受けたということである。藤谷氏は現在も製作を続けており、富田歌萌氏や千葉伸彦氏も藤谷氏の作品を使用している。

ここでは、藤谷氏の作品のうち、千葉氏が使用しているものを紹介する。以下に記す購入の経緯等の付随情報は 2003年に筆者が千葉氏から教示を受けたものである。なお、「藤谷 I」という資料名は調査時に筆者が便宜的に付したものである。

藤谷 I

1990年頃、千葉氏が二風谷の「萱野茂二風谷アイヌ文化資料館」裏の復元家屋を訪れた際に藤谷氏の作品を見かけ、購入したものである。頭部の裏には「1988.12 藤谷作」と彫られている。形状は萱野氏の作品と同じく、『蝦夷人弾琴図』によっている。材木にはマツを用いている。肩は丸く、首の付け根は肩から一段下がり、三味線のように軽く反っている。頭頂は尖っているが頭部全体は丸く、表面には精緻な彫刻を施してある。

中央に穴を穿ち、樹皮製の下げ紐を通す。頭部の裏面は、丸鑿のようなもので浅くえぐってある。耳は、向かって右に3本、左に2本配置され、耳の中央に穴をあけて弦を通してある。耳の断面は円形で先端へ近づくにつれ細くなっている。購入時は耳の穴がゆるく、弦が固定できなかったため、千葉氏が楽器工房に依頼して再加工したということである。弦は千葉氏が張ったものでギター用のナイロン弦を用いている。糸枕は上下で形が違うが、これも史料によっている。鏡板は胴に貼り付けたのみで、木釘等は使用していない。鏡板の表面には彫刻を施し、四辺は面取りしている。ヘソは約3cmの大きさで、菱型に作る。根緒は、菱型の鹿皮を半分折り、皮の先を樹皮糸で綴じて胴の下端近くに開けた穴を通して裏側に出す。現在千葉氏は、鹿皮の下に市販の三味線用の根緒(組紐製)を取り付けて使用している。

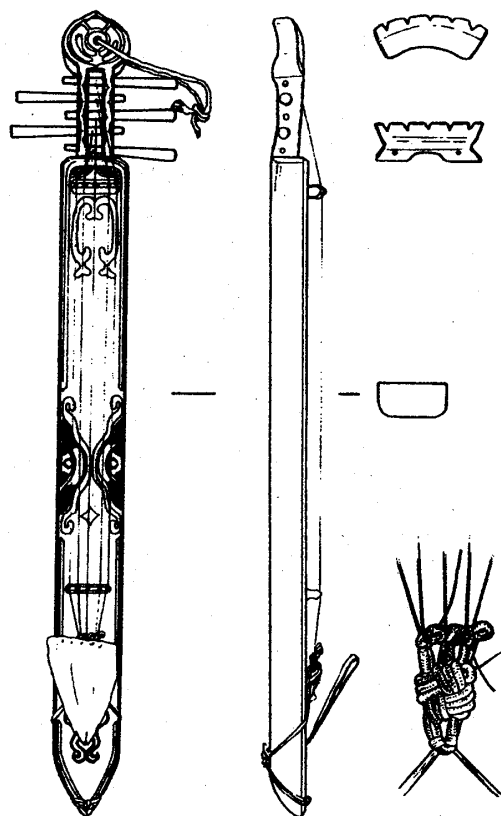


図5 藤谷氏のトンコリ I 千葉伸彦氏所蔵
L123cm W10cm H4.8cm

千葉氏は藤谷 I を購入後、更に 2 点の製作を依頼しているが、いずれも形状はほぼ同じである。

2-5. 宇田川洋氏(1944~)

東京大学北海文化研究常呂実習施設に赴任後、金谷氏の指導を受けて製作を開始する。宇田川氏は 1980 年以降、頻繁に行われたトンコリ製作や芸能の練習などにも参加し、常呂町樺太アイヌ文化保存会設立の際の主要なメンバーとなっている。1986 年には金谷氏との共著で、トンコリに関する史・資料紹介、先行研究、製作法、奏法などをまとめ、『樺太アイヌのトンコリ』として出版している。また、*tontehka* と呼ばれる板舟の復元を行い、作業の経過や考察などを『樺太アイヌの板舟』として 1989 年に発表している。

このほか、弓弭、小刀の柄あるいは楽器の頭部といわれてきた考古遺物「弓弭形角製品」とトンコリの関連を考察し、「弓弭形角製品」が楽器頭部のミニチュアだという仮説にもとづいて、トンコリの胴部と組み合わせたものを試作している[宇田川 1989]。

図 6 に示したトンコリは、1990 年頃に千葉氏が宇田川氏から譲り受けたものである。内部には心臓が入れている。金谷氏は心臓にガラス玉を用いることが多かったため、この作品も同様であると考えられる。肩は平らに作る。首は三味線のようにやや反っている。頭はほぼ円形で、頭頂部は尖っている。耳は握りの部分の断面が六角形になるように作り、耳の中ほどに穴をあけて弦を通している。耳の配置は、右に 2 本、左に 3 本で、平行ではなく、末端が放射状に広がるように取り付けられている。これは金谷氏の考案した様式である。弦は三味線のものを用いている。鏡板は胴の縁を 3mm ほど彫り下げてはめ込み、ボンドで貼り付ける。鏡板の表面には『蝦夷嶋奇観』の図を模した線刻を施す。へそは菱形である。根緒にはアザラシの毛皮を用いている。上端を折り返して 2 重にし、5 箇所穴をあけて弦を縛り付ける。胴の下端にあけた穴を通して裏に出す。毛皮の先端は木片に巻きつけ、太い輪ゴムで縛って固定している。胴の下端には刻印を刻んでいる。

2-6. 青山俊生氏(1960~)

青山(旧姓 黒岩)俊生氏は北海道教育大学岩見沢分校在学時に日本民俗舞踊研究会が常呂町で行った調査に参加した際に金谷氏からトンコリ製作の詳細を学

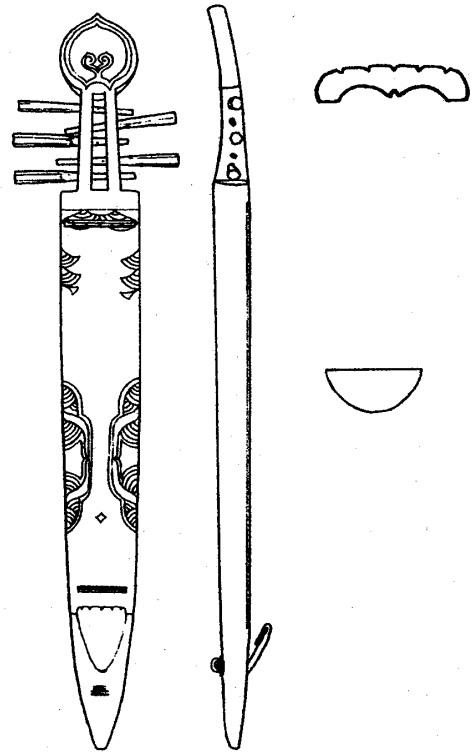


図 6 宇田川氏のトンコリ 千葉伸彦氏所蔵
L116cmW11.5cmH5.35cm

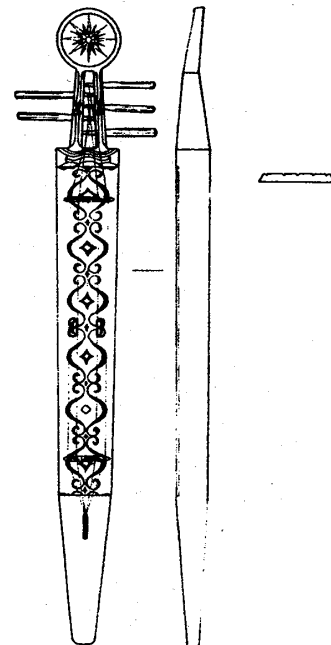


図 7 青山氏のトンコリ
[黒岩 1986]の写真による模式図。

んだ。1985年の調査終了後、金谷氏が製作講習用に作成した資料を参照しつつトンコリを製作する。同年にまとめられた日本民俗舞踊研究会の報告書に製作法の概要を報告している[日本民俗舞踊研究会 1985]。翌年には、この内容に、国内の博物館等に収蔵されているトンコリのデータや型式分類などを加えた報告を「民族楽器・トンコリ製作試論」としてまとめ、『土別市立博物館報告』第4号に発表している。その後標茶町郷土博物館に学芸員として赴任してからは、館の行事としてムックリやトンコリの製作講習を行っている。

図7は、「民族楽器・トンコリ製作試論」に掲載された写真をもとにした模式図である。以下に、写真の観察と青山氏の記述に基づいて氏の作品の特徴を述べる。青山氏は、心臓には宝石か小石を用いるとしているが、この作品における心臓の有無は不明である。肩は平らにつくり、首から頭部にかけては2段階に屈折する。耳は中ほどに穴をあけて弦を通す方式で、右に3本、左に2本配置する。鏡板は胴の縁を数mm掘り下げてはめ込み、ボンドで貼り付ける。鏡板の表面には模様を施す。この作品は、模様をマジックで描いた例ということであるが、頭部と肩の模様は線刻しているようである。へそは菱形に作る。根緒は、胴の下端に穴をあけて組み紐を通し、その紐に弦を結びつける方式である。

2-7. 川村兼一氏(1951~)

川村兼一氏は「川村カ子トアイヌ記念館」の現館長である。杉村満氏とも親しく、杉村氏の作品は同館にも展示されていた。また、1988年頃、旭川アイヌ語教室のメンバーのうち5名が常呂町を訪ね、金谷栄二郎からトンコリ製作の教授を受けた。この際、金谷氏の演奏をビデオに撮影し、アイヌ語教室で演奏の練習も行っているという。

川村氏の作品は、糸枕の形状、根緒の方式や鏡板に彫られた模様などに金谷氏の影響が見られる一方、全体の形状は杉村氏の作品とよく似ている。特にそれが顕著なのは頭部や首の形状であり、首の幅を広く作るために肩の部分が小さくなる点、首の両端や中ほどに窪みをつける点、背から頭部にかけての直線的なラインなどである。

ここで紹介するのは関東ウタリ会の北原きよ子氏が1994年頃に川村氏から購入したものである。心臓には木の実が2種が入れられていたが、片方はへその穴よりも小さかったため、使用中に飛び出してしまった。材はマツを用いている。肩は平らで、首は幅広く、まっすぐに作る。頭部は五角形で、面取りと彫刻を施す。耳は右に3本、左に2本配置し、耳の中ほどに穴をあけて、弦を通す。弦は三味線弦を用い、現在の配置は北原氏が張り替えたもので、右から細、太、細、細、太の順になっている。鏡板の表面には『蝦夷嶋奇観』の図を模倣した彫刻を施し、ボンドで貼り付けている。へそは菱形である。購入した当初の根緒は、アザラシ皮に5箇所穴をあけて弦を通し、そのまま弦を胴下端の穴から裏へ通して固定するものであった。現在の根緒は富田氏の指導で北原氏が作り変えたもので、組み紐を用い、紐の一端は胴下端にあけた穴を通して裏で固定している。弦を縛った部分には、上からアザラシの毛皮を被せている。

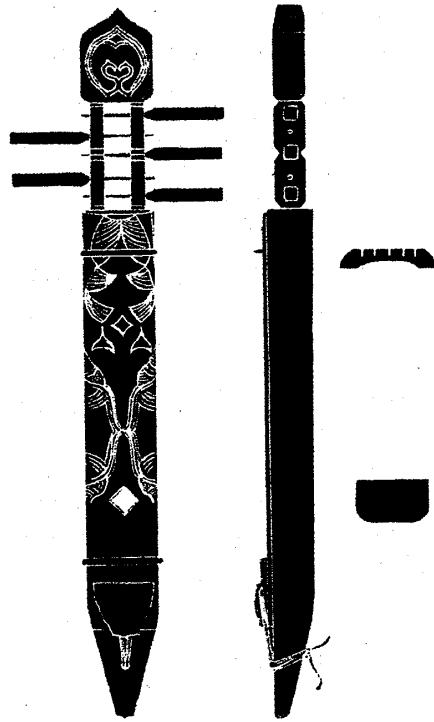


図8 川村氏のトンコリ 北原きよ子氏所蔵
L105cm W9.9cm H4.1cm

2-8. 秋辺得平氏(1943~)

秋辺得平氏は1990年8月に設立された釧路アイヌ民族芸企業組合の代表者である。秋辺氏は、同組合設立に先立ち、常呂町教育委員会が主催したトンコリ製作講習に参加して金谷氏と宇田川氏からトンコリの製作技術を学んだ¹⁴。以後、同組合においてトンコリが製作・販売されるようになる。こうした経緯から、同組合で製作されるトンコリは全体のバランス、糸枕や根緒の形式、表面の模様など金谷氏の作品の特徴を多く引き継いでいるが、現在では、楽器としての性能を追求したさまざま試みも行われている。

図9は、『アイヌ民族写真・絵画集成□ 民具』p153に掲載された写真をもとにした模式図である。同書の記述によれば、材にはエゾマツやホオを用いるとある。金谷氏からは心臓に浜辺の石を用いるよう指導されたということであるが、現在はクルミの実を用いているという。肩は平らで、端に丸みを帯びさせる。首は若干反らせ、頭部に近づくに従い幅がせばまるように作る。頭部は丸く、面取りを施す。耳は、右に3本、左に2本配置し、耳の中ほどに穴をあけて、弦を通す。弦は、三味線のものを用いる。鏡板は、胴の縁を数ミリくぼませ、はめ込む形ではり合わせる。表面全体に模様を施す。へそは菱形に作る。根緒にはアザラシの毛皮を用い、胴の下端付近にあけた穴を通して裏側へ出す。

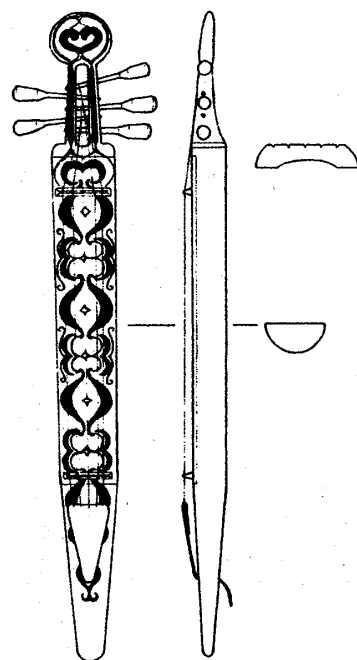


図9 秋辺氏のトンコリ
[横山編 1995]による模式図

3. 第2期の演奏者

3-1. 金谷フサ氏(1921~1986)金谷栄二郎氏(1923~2001)白川八重子氏(1926~)宇田川洋氏(1944~)

金谷フサ氏は藤山ハル氏の長女として樺太西海岸来知志に生まれる。戦後一時函館に住み、1952年から常呂町に在住し、1986年に死去するまで同町で生活した。白川八重子氏は、藤山ハル氏の次女である。北海道南部の鹿部町出来澗や函館に暮らした後、常呂町へ移り住む。

両氏は、幼少時に旧来の歌謡やトンコリ演奏に触れた体験を持つが、同程度か、それ以上に新来の音楽にも親しんでいたようである。筆者が白川氏から伺ったところによると、白川氏の家族は白川氏自ら「うちは民謡一家」というように、みな日本の民謡を好んだという。また、同村に暮らした従兄弟は尺八やバイオリンを演奏し、従兄弟のバイオリンに合わせて民謡を歌った思い出があるという。白川氏自身も函館に暮らした時期に民謡歌手に師事し、昭和40年前後には金谷フサ氏とともに紋別の民謡酒場に勤めたということである。

両氏がトンコリ演奏やアイヌの歌舞に携わるようになった背景には、前稿1-2で触れた米村喜男衛氏の活動が大きくかかわっている。網走市立郷土博物館の館長であった米村氏は、自ら考古学・民族学の研究を行うと同時に、外部から研究・観光という形で網走を訪れる人々を受け入れる窓口でもあった。1951年のNHKによる調査を始めとして、多くの調査が網走で行われたが、その際には必ずといっていいほど米村氏が場所を提供し、樺太アイヌを呼び集め、あるいは樺太アイヌのもとへ案内した¹⁵。また、「モヨロ祭り」や「オロチョンの火祭り」など新たな観光祭りを創始し、樺太アイヌやニヅフ、ウイльтаなど網走周辺に移住していた北方民

¹⁴ 1990年8月25日付けの北海道新聞第3社会面に掲載された記事および、秋辺氏からの教示による。

¹⁵ 例えば前稿4-1、4-4、4-5で触れた調査や、1955年の服部四郎氏(言語学)による調査など。

族を出演させ、芸能を披露させていた¹⁶。

金谷フサ氏と白川氏がこうした活動に関わったことが確認できる最初の記録は、1962年に常呂町公民館で行われたNHKの調査である。このときは、藤山氏をはじめ、両氏よりも上の世代の人々が参加しており、両氏は数人で歌う歌謡に加わったほかは、年長者の日本語を助けたり、記憶をたぐる手助けをする役割に回っていたようである。その後、両氏は1964年にNHKが製作した記録映画『北方民族の楽器』の撮影に参加し、数人で輪踊りを行う場面と、巫術の場面に出演している。

このほか、1963年から紋別市商工会の主催で行われた「流氷祭り」に数年間出演したという¹⁷。常呂町からは藤山氏と金谷フサ氏、白川氏ほか数名が参加したほか、興部町沙留から西平喜太郎・ウメ夫妻と、津軽三味線を弾く男性1名が参加した。「流氷祭り」では西平ウメ氏がトンコリを演奏したほか、輪踊りなどとともに民謡も披露したということである。

こうした場で披露した舞踊を身に着けた経緯について白川氏に尋ねたことがある。白川氏が語ったのは、行事の前に出演者が集まり、東海岸新聞出身の女性の指導で舞踊の練習をしたこと、その場には米村氏も同席していたこと、紋別の流氷祭りでは、会場で急に西平ウメ氏の舞踊を覚えることになり当惑したこと、といった記憶である。これらのエピソードからは、両氏や同世代の参加者が、行事への参加を契機として芸能を習得するという状況があったことが伺える¹⁸。

上記のように、両氏は第1期後半から、様々な場面で芸能に関与しているがトンコリの演奏はもっぱら西平氏や藤山氏が行っていた。両氏が前面に立ってトンコリの演奏をするようになるのは1979年頃からである。同年にCBS SONYから両氏の演奏を収めたLPレコード『トンコリ 滅びの五弦琴』が発売された頃から活動が活発化する。以後、金谷フサ氏は、夫の金谷栄二郎氏とともに網走郷土博物館などで度々演奏を披露するほか、家族や常呂町の人々、網走郷土博物館友の会会員などを対象に演奏技術の普及にも努めた(年表参照)。金谷栄二郎氏は自ら採譜した五線譜を用いて教習を行っていた¹⁹。

4. まとめ

第2期には金谷氏の活動によりトンコリ製作が急速に拡大したが、その反面、活動が持続したという印象は薄い。これは、ほぼ同時期に丸木舟や板綴船の建造がブームとなり、トンコリ製作を習得した人々の目がトンコリから離れたことと関連している。また、1993年からの国際先住民年の影響で、他の分野の活動が増大し

¹⁶ 「モヨロ祭り」は、米村氏自身が自らの創出であることを認めている[米村1985:74]。一方、「オロションの火祭り」については、「樺太から引きあげて網走にいる人たちが毎年行っている」とし、自らの関与を明言していない[米村1985:146]。後には、集客力を増すためか、あたかも伝統的な祭礼であり、網走に暮らす北方民族の人々が自発的に行っていることをほのめかすような宣伝が行われるようになったことから、批判の声が高まった。祭りが始まった経緯、および祭りに参加していたウイルトタの人々の複雑な心情については田中了氏の報告にくわしい[田中1976:106-121][田中・ゲンダ一ヌ1978:220-239]。

¹⁷ 紋別市の「流氷祭り」については、別稿を用意する予定である。なお、北海民友新聞や紋別新聞の記事を見ると、藤山氏らの参加は1963年から1965年の3年間だったようである。これらの新聞資料については田村将人氏から提供を受けた。

¹⁸ 筆者は、これと似た状況が北海道の他地域でも起こっていたのではないかと考えている。例えば、金谷フサ氏と同齢である帯広市の上野サダ氏は1964年に旭川市で開催された「北海道アイヌ祭り」への参加を契機として、芸能を習得したという。ただし、帯広では1950年代から舞踊の「保存会」的な活動が行われていたので、上野氏の事例がどの程度普遍化できるかは検討を要する。なお、このエピソードは2002年5月17日に行われた(財)アイヌ文化振興・研究推進機構主催のアイヌ文化公開講座における上野氏の講演内容による。

¹⁹ 1981年4月12日付けの読売新聞記事による。

たこと、北海道のアイヌにはなじみが薄い感があったことも考えられるが、最大の要因は演奏者が不在であったことである。

5. 第3期の活動(1990～)

90年代に入ると、常呂町樺太アイヌ文化保存会の活動はあまり見られなくなり、代わって、東京近辺や旭川で新しい動きが起こる。1990年頃から、ギタリストである千葉伸彦氏がトンコリについての情報収集を始める。また、1992年には関東ウタリ会や加納沖氏が活動を開始する。

1993年の国際先住民年以降は、アイヌへの注目が特に高まった時期である。芸能グループ「MOSHIRI」の公演などによってアイヌの音楽が脚光を浴びる中で、加納沖氏がトンコリの演奏を収録したCDを発表したことにより、トンコリの知名度が高まった。これにより、新たにトンコリの製作・演奏を学ぼうとする者が増えた。また、演奏者の増加により、既存の製作者に楽器としての性能を重視する意識が生まれ、他の楽器を参考に改良を加える試みもなされている。奏法についても、加納氏に代表される新たなスタイルが現れる。

一方、第2期からつづく「伝統回帰」の志向は、精神文化への関心の高まりを生む。本田優子氏が指摘するように1993年前後から、アイヌ文化を語る際、特に精神文化を強調するという場面が多く見られるようになっている[本田1997:115]。こうした中で、トンコリも精神文化と結びつけた説明が広まっているように感じる。

第3期の区分は、千葉氏が活動を開始した時期(1990年)から現在までとしているが、1997年のアイヌ文化新法成立後の状況は非常に多様で、これを全て取り上げることは調査不足の点からも、紙幅の関係からも困難である。従って本稿では、新法成立以前の事例のみを取り扱った。ただし、関東ウタリ会と、諏訪良光氏のトンコリ製作は例外としてとりあげた。これは、新法成立以前からの活動との連続性を考慮したためである。

6. 第3期の製作者

6-1. 加納沖(OKI)氏(1957～)

加納氏は1992年に川村カ子トアイヌ記念館を訪れ、同館に収蔵されていた杉村満氏のトンコリに触れたことを契機に、演奏に取り組むようになった²⁰。当初は杉村氏や千家盛雄氏の作品を使用していたが、自らも製作して演奏を行うようになる。1995年には、製作に関する考察を「トンコリを復元して」と題したコラム(以下「コラム」と略す)に執筆している[平凡社編1995:39]。「コラム」には、氏の作品を演奏している写真も掲載されている。

図10は1996年に発表した『KAMUY KOR NUPURPE』のジャケット写真をもとにした模式図である²¹。加納氏によれば、このトンコリは杉村氏の作品をベースに構想し、金谷・宇田川氏の著作も参照しているという。なお、この作品は6弦である。全体を黒く着色し、線刻した部分が、白く浮きあがるようにデザインされている。「コラム」によれば心臓にはガラス玉を用い、トンコリと自分の魂として計2個入れるとある。その後、幾度か修理・調整をし、現在



図10 加納氏のトンコリ
『KAMUY KOR NUPURPE』のジャケットによる模式図。
L116cm W12.5cm

²⁰ 加納氏のより詳細なプロフィールは、氏のHPを参照[<http://www.tonkori.com/>]。

²¹ この図については、加納氏本人から全体のバランスが不正確であるという指摘をいただいている。本稿では時間的な制約からこのまま掲載するが、いずれ機会をみて訂正したい。

は礼文島産のメノウが1つ入っているという。肩は丸く作り、首はやや反らせる。頭部は丸く、頭頂を尖らせる。頭部の表面に線刻を施す。耳は、右に3本、左に2本配置した後、左側下部に1本足したようである。弦はクラシックギターのものを用い、配置は向かって右から細、細、細、太、太、太である。鏡板の全面に『蝦夷嶋奇観』所載のトンコリの図を模した模様を施す。へそはやや大きく菱形に作る。根緒の部分には、シャチが描かれている。シャチの背にあたる部分に穴をあけて弦を通し、裏側で木片に結んで固定している。このシャチは捧酒籠の高彫りを模したと思われ、これを根緒に応用したデザインはユニークかつ美しい。

6-2. 関東ウタリ会

関東ウタリ会は、1992年頃から富田歌萌氏のもとでトンコリの習得を開始した²²。関東ウタリ会が富田氏と知遇を得たのは1990年である。同年、北海道ユニセフ協会は北海道ウタリ協会への寄付を決議し、東京で記念集会を開いた。関東ウタリ会も記念集会への案内を受け、その会場で、北海道ユニセフ協会の代表を務めていた富田氏と対面した。

会員は当初、富田氏の所蔵するトンコリを借りる、あるいは秋辺得平氏や川村兼一氏の製作したトンコリを購入して使用するなどしていたが、各々の使用感にあったトンコリを演奏したいという要望があった。96年頃に会員の丸子美記子氏がトンコリを試作したのを契機に、会員各自が製作を行うことになった。1998年に財団法人アイヌ文化振興研究推進機構の伝統工芸複製事業の助成をうけ、東京国立博物館の収蔵品(収蔵番号25743)を複製した。これに先立ち予備調査として会員有志が常呂町の金谷栄二郎氏のもとを訪れ、製作上の要点について教示を受けた。また、実際の作業に際しては、富田氏が奏者の観点から様々なコメントをした。

ただし、これらの情報から、何をどの程度作品に反映させるかという判断は各自に委ねられていたため、完成したトンコリには若干の差異がある。図には、北原きよ子が製作したトンコリを示した。心臓にはガラス玉や陶製の玉を用いている。材木はホオを用いた。肩は平らにつくり、首はまっすぐにして、頭頂は尖らせる。耳は右に3本、左に2本配置し、耳の中ほどに穴をあけて弦を通す。弦の張り方は西平ウメ氏に習

い、右から細、太、細、細、太に配置する。鏡板はボンドや木釘で固定している。なお、東京国立博物館の収蔵品は無紋だが、会員によっては思い思いの彫刻を施している。へそは菱形である。根緒は組み紐を用い、胴の下端に開けた穴を通して裏へ出す。弦を縛った部分には上からアザラシの皮を被せている。

6-3. 諏訪良光氏(1948～)

諏訪良光氏は標茶町塘路に在住し、工房「サルンパ」を経営している。阿寒で民芸品製作の経験があった諏訪氏は、標茶町郷土館の学芸員であった青山俊夫氏が製作したトンコリ等を参考にし、1998年頃から製

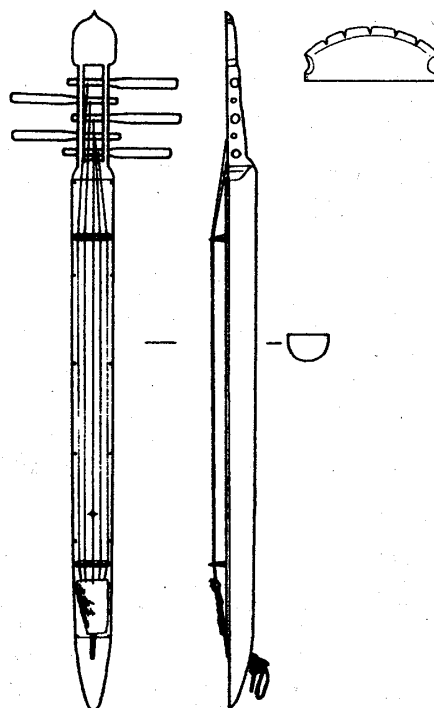


図11 北原氏のトンコリ
L121cm W7.5cm H4.3cm

²² 富田氏については前稿4-3を参照。

作を開始した。同年3月に、青山氏とともに同館の主催でトンコリの製講習を行っている。

筆者は諏訪氏の作品を実見する機会を得ていない。ここでは、雑誌『ウッディライフ』85号(山と溪谷社1999年11月発行)に掲載された諏訪氏のインタビュー記事と写真をもとに、諏訪氏の作品の特徴を記す。心臓にはガラス玉を、本体の材にはカツラやエゾマツを用いる。肩は平らに作り、首の付け根は一段低く彫り込んでいる。首はまっすぐに作り、頭部は丸い。頭部には彫刻を施す。耳は右に3本、左に2本配置している。鏡板は、胴の表面全体を覆うように作り、ボンドで貼り付け、表面に彫刻を施す。へそは菱形に作る。根緒にはアザラシの皮を用い、胴の下端にあけた穴をとおして裏に出して固定する。

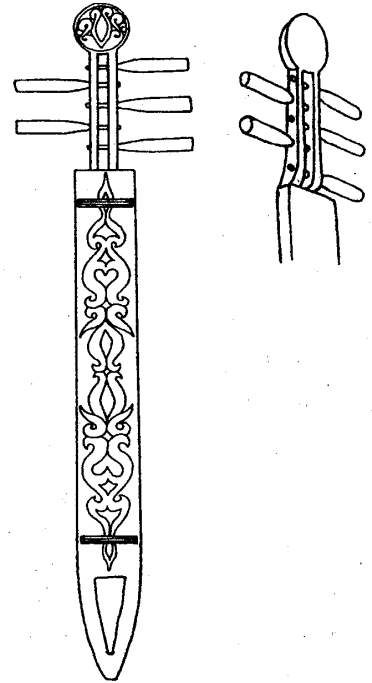


図12 諏訪氏のトンコリ
『ウッディライフ』85号の写真
による模式図

7. 第3期の演奏者

7-1. 富田歌萌氏

富田歌萌氏は西平ウメ氏と木村チカマ氏からの取材をもとに研究を行ったほか、自らも演奏を習得し、演奏者として活動している。また、1990年頃からは各地に招かれて多くの人々に演奏法の講習を行い、第3期の演奏者のほぼ全員に、直接・間接に影響を与えている。本稿で紹介した千葉伸彦氏、関東ウタリ会、加納沖氏も、富田氏から指導・資料提供を受けている。富田氏は、初心者への教習のために、西平氏や木村氏の楽曲から基本となるフレーズを抜き出し、音階のほかに奏法も盛り込んだ奏法譜を作成して用いている。

7-2. 千葉伸彦氏

ギター、三味線等の奏者である千葉伸彦氏は1989年頃からアイヌの音楽に関心を持ちはじめ、1990年以降北海道内各地で聞き取り調査を行った。旭川、白老、沙留、登別、千歳、様似、門別町富川、門別、平取、阿寒、屈斜路、白糠、虻田、三石、新冠、静内、釧路、本別、鶴川などを訪ね、特に歌唱法に注目した研究を行っている。

1990年に旭川の川村兼一氏のもとでトンコリにふれたことからトンコリの研究を開始した。旭川の杉村満氏や二風谷の藤谷憲幸氏を訪ね、トンコリを収集する一方、富田歌萌氏に師事し、西平ウメ氏に由来するトンコリ演奏を習得する。また、NHKが記録した音声や映像を解析し、藤山ハル氏やN・Y氏の奏法を復原して自らのレパートリーとしている。こうして復元した奏法を論文や講演の形式で発表することも行い、1992年に「映像に見るトンコリ—藤山ハルの奏法について」(同人誌『ウエネウサラ』10号所収)を発表、1996年には『北海道東北部に残る樺太アイヌ文化』に「藤山ハルのトンコリの演奏法について(1)」を執筆している。

近年はトンコリの演奏活動を行っていなかったが、2002年10月13日に(財)横須賀芸術文化財団主催の「世界民族音楽の旅 第2回 日本 アイヌの伝統文化「大自然のいぶき」」に出演し、6曲を演奏している。

7-3. 加納沖(OKI)氏(1957～)

加納沖氏がトンコリに触れた経緯は6-1参照。加納氏は富田歌萌氏の論文「アイヌの弦楽器トンコリ」を入手し、文中に掲載されている富田氏作成の楽譜をもとに独習したという。また、1992年に富田氏を訪ねて教示をうけたほか、録音資料の提供も受けたという。従って、加納氏のレパートリーは富田氏が採録した西平ウメ氏の演奏曲が中心になっているが、このほかNHKなどが収録した録音資料、北海道内各地の歌謡などを

参照して作曲を行っている。また、歌詞には静内に在住した葛野辰次郎氏の言葉を取り入れている。近年は、帯広市に住む安東ウメ子氏と共同で創作活動を行っているほか、ナヴァホ、アボリジニ、台湾先住民、東ティモール、シベリアのチュクチなど世界の諸地域の音楽家と交流し、共同での創作を行っている。

これまでに『KAMUY KOR NUPURUPE』、『HANKAPUY』、『NO-ONE'S LAND』の3枚のCDアルバムを発表しているほか、各地で演奏活動を行っている。また、2001年には安東ウメ子氏のソロアルバム『IHUNKE』をプロデュースしている。

7-4. 関東ウタリ会

関東ウタリ会は、関東付近に居住するアイヌが集まり、「北海道を離れ都市に住むウタリの生活問題、悩みなどを相談しあい、解決をはかる。アイヌ文化を学び伝える」ことを主旨として1980年に設立された[関東ウタリ会編 1997:96]。86年の中曽根元首相による「単一民族発言」に対する公開質問状提出、88年から89年にかけて行われた東京に住むアイヌの実態調査など社会的な問題に取り組む一方、アイヌ語、芸能、刺繍等、伝統的文化の習得を目指してきた。1987年からは「アイヌ文化と人権の集い」を毎年開催し、外部から講師を招いて講演等を行うほか、同会の諸活動を発表する場としてきた。

1992年に会員の八幡智子氏と横山仁美氏が富田歌萌氏のもとを訪ね、富田氏のもとでトンコリ演奏の習得を開始した。1994年からは丸子美記子氏、横山むつみ氏、北原きよ子氏らの他の会員も富田氏のもとに通うようになった。

以後、上記「アイヌ文化と人権の集い」や、北海道ウタリ協会主催の「アイヌ民族文化祭」等で度々演奏を行っている。近年では2001年3月10日に青山円形劇場で開催された『アイヌ音楽の夕べ トンコリとムックリ』に同会メンバーが出演し演奏している。また、これにさきがけて、関東ウタリ会がこれまでに習得した楽曲、鷲谷サト氏の歌謡などを収録したCD『アイヌラマチ(アイヌの魂)からのメッセージ』を発表している。

8. まとめ

第3期には、演奏者が増加したことに加え、演奏者自身が製作に携わることにより、全体的にトンコリの品質が向上してきている。加納氏に代表される新しい演奏スタイルが広く受け入れられる一方、関東ウタリ会や、新法成立後に演奏を開始した人々には第1期の人々の演奏スタイルを学ぼうとする傾向が見られ、一見すると全く逆の流れが生じてきているように思われる。しかしながら現象のみに視点を当てれば、どちらの立場においても製作・演奏における再創造が起きているのは明確であり、かつ、当事者の意識のレベルにおいてはいずれも「伝統」への志向を強く持っていることに注目すべきである。そのことは、トンコリの形状・演奏法ということ以上に、トンコリと精神文化との結びつきを強調する言説が目立つことからもうかがえる。こうした、ごく近年の意識の流れについては、今後も各製作者・演奏者の発言などから情報を収集しつつ整理していきたい。

終わりに

以上、前稿と本稿を通じて、終戦から現在にいたるまでのトンコリに関する諸活動と、時代的な背景を概観してきた。

ふりかえると、楽器としてのトンコリについては第1期のものはほとんど残らず、金谷氏の作品を原型として第2期以降に普及した物が主流になっている。また、楽曲は西平氏の演奏に由来する物がもっとも普及している。筆者はしばしば、トンコリに関心のある人々から「伝承は途切れずに伝わっているのか」と聞かれることがある。これに答えるとすれば、製作と演奏は、近いところに出自をもつものが、別の経路をたどって現在にいたり、現在の活動はそれらを混成して成り立っているということだろうか。また、付け加えれば、トンコリの説明として「3~6本の弦を持ち」という表現が常用されているが、第1期以降に製作されたトンコリは復元など特殊な

例を除けば全て5弦である。また、演奏に関しても、少なくとも大正期以降に記録されたものは全て5弦のものである。

また、トンコリに関わる人々の意識面についていえば、第1期と第2期以降では大きな隔りがある。

樺太で生まれ育った人々の多くは、北海道への移住後に初めて差別を経験したと異口同音に述べる。それに加えて、移住後の経済的困窮など困難な状況がアイヌを取り巻いた。第1期は、トンコリをはじめとする様々な文化的事項が、そうした状況を切り開くものとして、新たな価値を付与された時期であるといえる。しかし、当事者たちはトンコリを、あくまで同時代のものとして楽しんでいた感がある。

これに対し、第2期には「真性なアイヌ文化＝過去のアイヌ文化」への志向が生まれ、過去のアイヌと自己を同一化しようという動きが起こった。しかし、社会的な状況が大きく変化した状態で完全な同一化を果たすことは不可能であるとともに、同一化を意識したことは逆に過去と現在の差異を強調し、深い喪失感を生み出す結果になったものと思われる。それを解消するために、さらに伝統回帰の志向が強まるという循環が、現在まで続いている。

一方で、そうした強い要望があるにもかかわらず、個人が享受できる情報は微々たるものである。第3期に顕著になってきた、「伝統回帰」と「創造」といった志向の分化に見える状況は、情報不足に起因するところが多いというのが筆者の理解である。こうした状況はトンコリに限らず様々な分野で起こっているが、情報の不足している分野ほど、その傾向が強いように感じる。反対に、アイヌ語や衣服など比較的情報が豊富な分野では、人々の動向は均質化して見えるのである。

謝辞

本稿執筆にあたり、以下の方々から多大なご協力をいただきました。以下に、ご氏名を記し、御礼に代えさせていただきます。

青柳信克氏 青山俊生氏 秋野茂樹氏 秋辺得平氏 荏原小百合氏 太田満氏 金谷栄二郎氏(故人) 加納沖氏 萱野茂氏 川村兼一氏 北原きよ子氏 木原仁美氏 甲地理恵氏 斉藤勇氏 齋藤玲子氏 佐々木亨氏 澤井玄氏 白川八重子氏 杉村フサ氏 杉村満氏(故人) 諏訪良光氏 千家盛雄氏 谷本一之氏 田村将人氏 丹菊逸治氏 知里むつみ氏 出利葉浩司氏 遠山サキ氏 富田歌萌氏 西平多美氏 野田一正氏 藤谷憲幸氏 (社)北海道ウタリ協会本部 丸子美紀子氏 村木美幸氏 八幡智子氏 山崎幸治氏 横山孝雄氏

付記

前稿の脱稿後に、秋野茂樹氏から新たな資料について教示を受けた。これは、尾沢カンシャク氏が1967年に北海道文化財保護功労者として表彰を受けた際に、尾沢氏の知人有志が作成した『受賞記念誌』である。同資料p10に尾沢氏のトンコリ製作について記載があるので、以下に引用する。文中の誤字は改めた。

「(前略)以前から尾沢さんは何とかトンコリを伝承したいと考えていた。たまたま戦後、樺太から引揚げてきていま北見紋別に住む西平ウメさんがこの伝承をしていることを知ったのでウメさんを自宅に招き約1カ月余にわたって滞在してもらい、その楽器をみながら試作に試作をかさね、それと同じような品を作り、演奏法も習い、現在長男の満さんが父の意思を生かし演奏技術を身につけたしウメさんの演奏の録音もふんだんにとつてある。(後略)」

というものである。尾沢氏のトンコリ製作に西平ウメ氏の関与していたことについて、前稿では可能性を指摘するにとどまったが、この資料によって確証を得ることができた。また受賞当時、尾沢氏に対して旭川市立郷土博物館、網走市立郷土博物館がトンコリ製作を依頼していたことも書かれており、新たな事実が掘り起こされる可能性が示されている。秋野茂樹氏には重ねて御礼申し上げたい。

関連年表

凡例

・年表の記載内容は、筆者の調査および文献等による。文献の記載で誤りと思われる箇所は、ここでは修正せず、文頭に*を付しておいた。

・記載項目のうち製作者に関するものには●、演奏者には○、両方に関するものには◎を付した。

・出典欄のNo.は、参考文献に挙げた文献の末尾に付したNo.と対応する。聞取り情報は話者氏名と聞取り年を記載した。新聞記事については紙名略称と。掲載年月日を示した。略称は次の通り。北海道新聞→道新 北海道毎日→北毎 北海民友新聞→北民 読売新聞→読売 朝日新聞→朝日

年代	元		出典
1856	安政3	○ヲタサン(樺太東海岸小田寒)のヲノワシが松浦武四郎に出会い、演奏を聞かせる。トンコリ1本を贈る。	48
1858	5	●常呂川上流大茶内のトツパイサンが松浦武四郎にトンコリを贈る。	47
1875	明8	・千島樺太交換条約締結。	
1876	9	・亜庭湾周辺の樺太アイヌ約840名が江別の対雁に強制移住。	16
1887	20	・8月17日 上野正、対雁の死者を記念した碑を建て、建立の弔祭を施行。	道新1887.8.12
1889	22	・10月13日 対雁アイヌの共救組合が石狩来札に製網所を新築。開業式にて組合総理上野正らの演説の後、アイヌの「弾絃舞踏」となり盛会。	北毎1889.10.19
1894	27	・12月28日 石狩八幡町字来札で樺太アイヌが熊送り。	北毎1895.1.11
1896	29	・ Mabel Loomis Toddが北海道で5弦のトンコリを収集。	56
1905	38	・日露戦争終結。これより数年前から対雁のアイヌは徐々に樺太へ帰還。	16
1910	43	・4月 樺太庁長官が樺太アイヌの民芸品製作を奨励。	13
1912	大1	○上野で拓殖博覧会開催。木村チカマ氏ほか3名が参加。	34
1913	2	○4.S・K氏と西平ウメ氏ほか2名が大阪天王寺の博覧会に参加。7月に戻る。	50
1923	12	○8月3日 田辺尚雄氏が樺太東海岸でアイヌ、ウイルタ、ニブフの芸能を取材。白浜で英雄叙事詩、口琴、トンコリ演奏等を録音。灰場ノドケ氏という女性がトンコリを演奏。餞別としてトンコリを1本贈られる。帰路、相浜でアイヌ青年が北海道で学んだというヴァイオリンの演奏を聴く。 ◎アシナイゲン氏が田辺氏の記述に現れる。同氏はこの年に死去。	30 21,30
1935	昭10	・8月10日～久保寺逸彦氏、二谷国松氏とともに北海道・樺太調査。 ○8月15日～16日落帆の尾山ヨシ氏、内藤ヨーキ氏らの演奏、歌舞が映像とレコードに収められる。内藤ヨーキ氏はアイヌ歌謡の他、松前追分を歌っている。 ○8月22日～23日 新聞で平村マツ子氏、東カヨ氏、中川テルコ氏、大山エカイタマ氏の芸能を調査。平村氏、大山氏がトンコリを演奏。平村氏は「ロシアノ曲ヲ真似タルモノ」を演奏している。	22 ・北海道立図書館所蔵の久保寺資料テープNo.114の箱書 同上テープNo.67の箱書
1937	12	・9月25日 米村喜男衛氏、モヨロ祭りを開始。当初は米村氏一人で行った。	54
1940	15	・白浜の女性が「松前ピリカ」に入る。	大坂氏2002
1947	22	・NHKがアイヌの芸能を調査・録音。知里眞志保氏監修。	42
1948	23	Б.А.Жеребцов氏樺太調査。同行者が木村ウサルシマ氏の演奏を撮影。 ○西平夫妻、興部町沙留に移住。	57 38

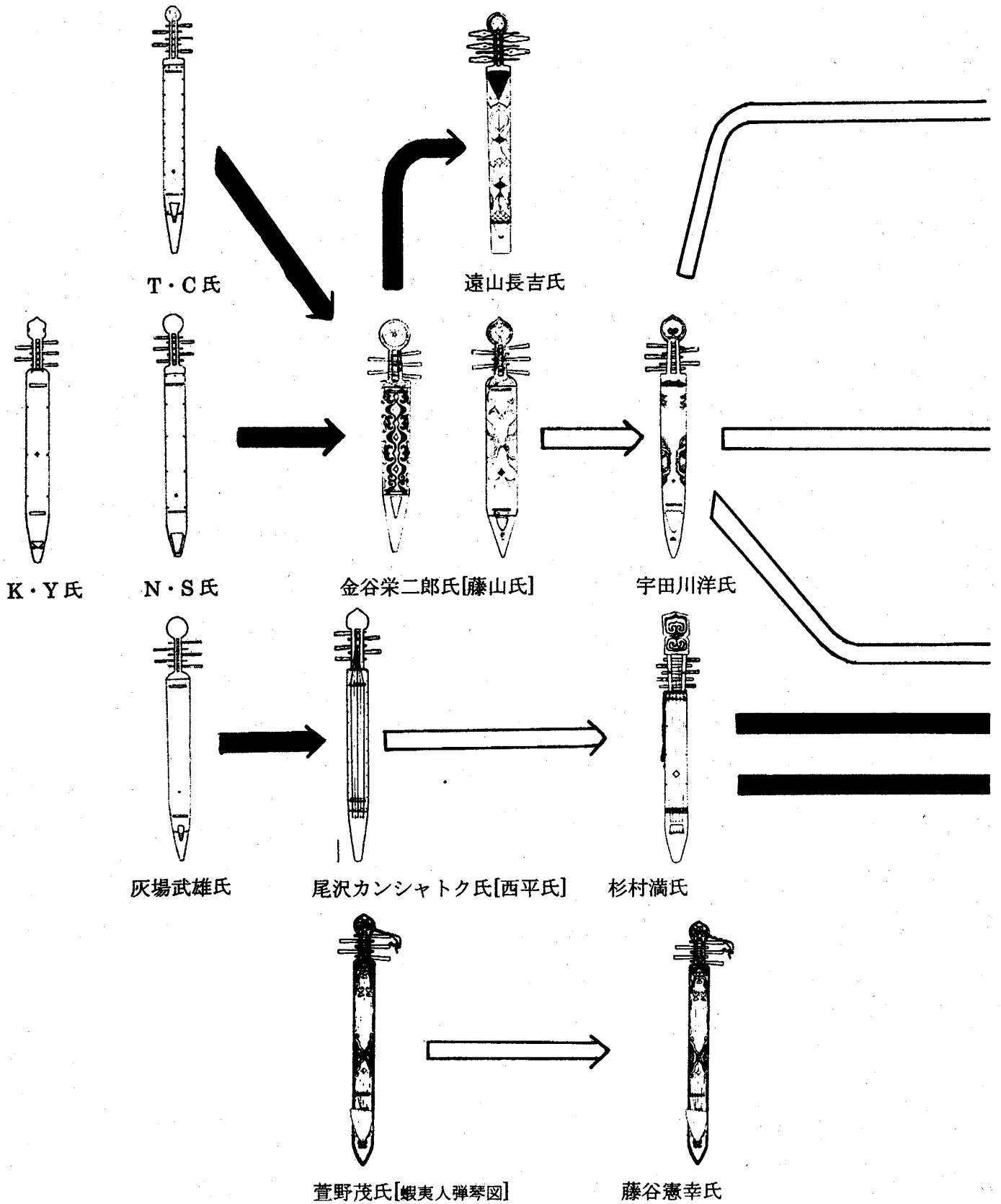
		・NHKがアイヌの芸能を調査・録音。知里眞志保氏監修。	42
1951	26	・6月22日23日網走郷土博物館でNHKが樺太アイヌの歌謡等を録音。監修知里眞志保氏。録音担当小川昂氏。NHK調査班に黒沢隆朝氏が同行。 ・6月24日～26日 NHK帯広放送局で同様の調査。 ○6月30日 NHK調査。S・K氏のトンコリ演奏が録音される。 ・10月8日 モヨロ貝塚で「第1回モヨロ祭り」。アイヌが参加。観衆1万人。	17,18,41,42 18 1 9
1952	27	○8月6日 本田安次氏が釧路で芸能調査。木村ウサルシマ氏参加。 ●9月20日 K・Y氏製作のトンコリを北海道大学農学部博物館が収集。 ・作家平林たい子氏が常呂町の樺太アイヌに会う。 ○釧路市立図書館編『アイヌ古式舞踊の研究:附・アイヌ古式舞踊見学』出版。木村ウサルシマ氏の写真掲載。	44 資料記載 9
1953	28	・10月2日 米村喜男衛還暦記念モヨロ祭り。樺太アイヌのほか、北見(美幌)、釧路のアイヌが参加し、総勢60余名が「古代舞踊」を披露した。	9,54
1955	30	○服部四郎氏(言語学)が米村喜男衛氏の案内で常呂を調査。藤山ハル氏と出会う。これ以後藤山氏がインフォーマントとして注目されることに。 ・9月30日 NHKが網走市で樺太アイヌの歌謡、祈り詞等を録音。 ・10月29日 モヨロ貝塚の史跡指定20周年を記念し、桂岡グランドで樺太アイヌが熊送り(主催 網走郷土博物館)。 ・10月30日 本祭に続き、網走小学校講堂で後祭(祝賀会員のみ参加)。熊料理を振る舞うほか、歌と舞踊を上演。会費1人1000円。	49 59 9 54
1956	31	○7月25日 増田又喜氏が 米村喜男衛氏の紹介で樺太アイヌに会う。山田ハル氏ほか2名に取材。アウステルリッツ・ロバート氏と会う。 ○2月19日 知里眞志保・小田邦雄共著により『ユーカラ鑑賞』を出版。巻頭にS・K氏が演奏している場面の写真を掲載。 ・ニポポ人形網走観光土産として出回る。	46 33 6
1957	32	・9月22日 モヨロ貝塚で金田一京助歌碑建立式典。樺太アイヌ30人参加。 ○旭川の尾沢カンシャク氏が層雲峡で熊送りを行う。この時、西平ウメ氏が招かれ、層雲峡を訪れてトンコリ、ムックリを演奏している。また、旭川に向かい、川村カ子ト氏、荒井源次郎氏らにトンコリ演奏を披露する。	9 21,杉村夫妻
1958	33	・1月5日 増田又喜氏、常呂町で歌謡を録音。 ・谷本一之氏「アイヌの五弦琴」(『北方文化研究報告』第十三輯)発表。	46
1959	34	○近藤鏡二郎氏・富田歌萌氏が西平ウメ氏を訪ね、トンコリの曲目、演奏法を調査。62年頃までつづく。 ・9月10日 HBC製作の観光記録映画『オホーツク物語』野取湖のサンゴ草と北方少数民族踊りで撮影終了。 ・9月26日 モヨロ貝塚で第2回モヨロ祭り。会場を桂ヶ岡公園に移動して「オロチョンの火祭り」初公開。	38,富田氏2002 9 9
1960	35	●N・S氏がトンコリ制作(釧路博物館所蔵品、白川八重子氏所蔵品)	14,白川1998・2002
1961	36	●11. 近藤鏡二郎氏・富田歌萌氏の依頼で灰場武雄氏とT・C氏がトンコリ製作。	38,富田氏2002

		OS・K氏(1881～)大江村(現 仁木町)で死去。	23
		・NHKによる『アイヌ伝統音楽』の調査開始。	
1962	37	・7月～10月 更科源蔵氏がNHKの『アイヌ伝統音楽』調査のため、藤山ハル氏、西平ウメメらに取材。	25
		○富田歌萌氏が木村チカマ氏に取材。	38
		●T・C氏が製作したトンコリ1本と演奏を録音したテープが近藤鏡二郎氏を通じて小泉文夫氏の元へ(現 東京芸大小泉文夫記念資料室所蔵。No.208)	19
1963	38	・近藤鏡二郎氏・富田歌萌氏が「アイヌの弦楽器”トンコリ”」(『音楽学 第9巻(1)』所収)を発表。	
		○3月3日 紋別市で「流氷祭り」始まる。藤山ハル氏、西平ウメ氏、西平喜太郎氏、金谷フサ氏、白川八重子氏、ほか数人がトンコリ、舞踊、民謡、三味線などを披露。	北民1963.3.5 白川氏2002
		・9月20日 常呂町開基80年祭、仮装行列で開幕。これに合わせて「常呂コタン祭り」を開催しT・C氏氏ら参加。	26
		・米村喜男衛氏・哲英氏が『樺太アイヌの歌舞』出版。	
1964	39	○NHKが記録映画『北方民族の楽器』制作。監修は更科源蔵氏。西平ウメ氏、藤山ハル氏の演奏を収録。	
		○旭川市で「北海道アイヌまつり」開催。常呂町、紋別町から樺太アイヌとして藤山ハル氏、西平ウメ氏、白川八重子氏ほか数名が参加。舞踊その他に参加した。	旭川市製作の記録映像
1966	41	・富田歌萌氏が「アイヌに弦楽器“トンコリ”」(『北海道の文化10』)を発表。	
		・オホーツク流氷祭り始まる。	9
1967	42	・4月3日 小泉文夫氏が、米村喜男衛氏の紹介によりウルグアイのTosar,Hector氏とともにアイヌ音楽を調査。西平ウメ氏ほか2名に取材。	21
		●12月16日 T・C氏(1900.5.13～)死去。	40
1968	43	*9月4日 T・C氏がトンコリ制作。網走郷土博収蔵(→北方民博1266)	8
		●旭川の尾沢カンシャク氏がトンコリを復元。	3
1969	44	○5月10日 紋別で開かれた「アイヌ文化展」に関連して行われたトンコリ演奏会で西平ウメ氏が演奏。入場者計24名。	50
		○Kirsten Refsing氏(言語学)が常呂を訪れ、藤山ハル氏ほかに会う。藤山氏の演奏を録音したほか民芸品を多数購入。	55
		●金谷栄二郎氏が製作したトンコリをRefsing氏が購入。	55
1970	45	*3月25日 ビクターが樺太アイヌの歌謡等を録音。(おそらく71年の国立劇場での公演のために上京した際に、録音されたものと思われる。)	59
		*T・C氏がトンコリ制作。	8
		●大館弘氏が西平ウメ氏の指導によりトンコリ制作。	14
1971	46	○3月26日～28日 藤山ハル氏、金谷フサ氏、金谷栄二郎氏ほかが東京の国立劇場小劇場で開かれた「国立劇場第11回民俗芸能公演」のうち『アイヌ』『オロッコ、ギリヤーク』の芸能』に参加。トンコリ演奏、演劇上演。この催しには網走市からウイルタとニブフ、平取町二風谷のグループが参加した。	4, 読売1981.4.11
		●浦河の遠山長吉氏が製作したトンコリを弟子屈町アイヌ民俗資料館に寄贈。	14,遠山氏2002

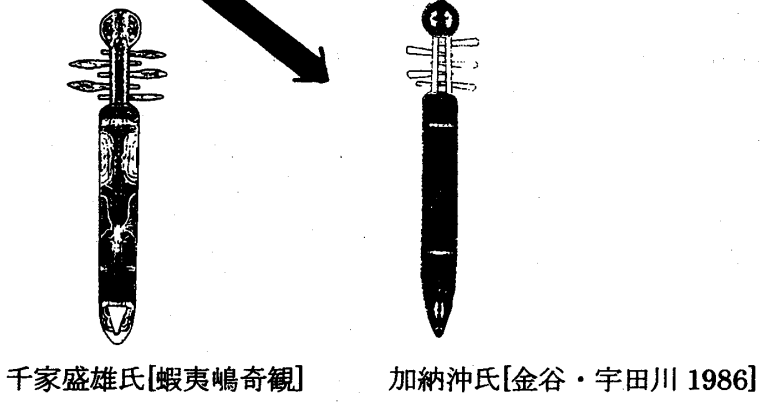
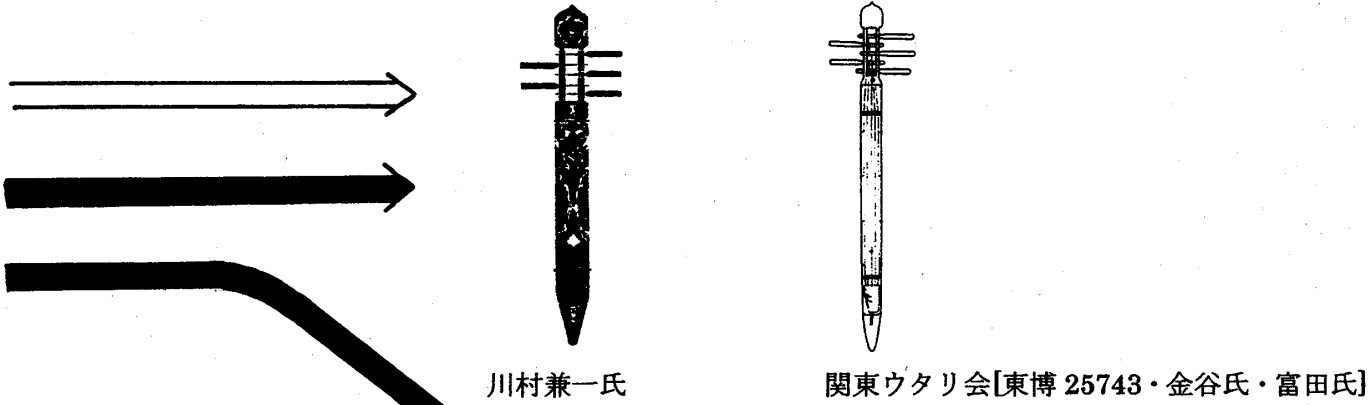
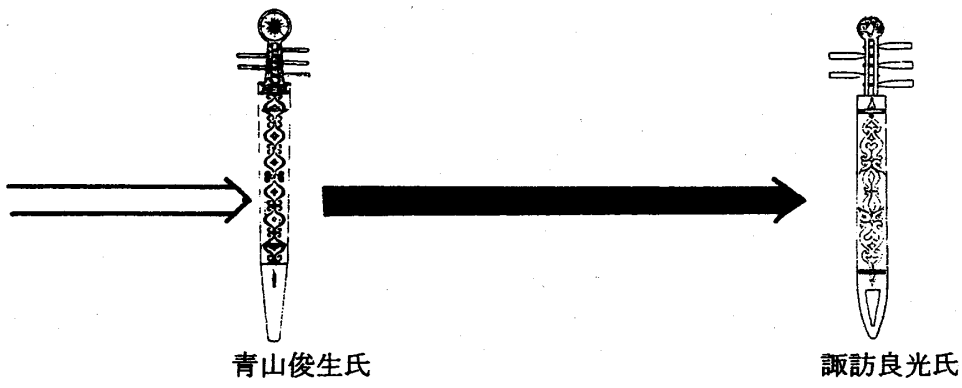
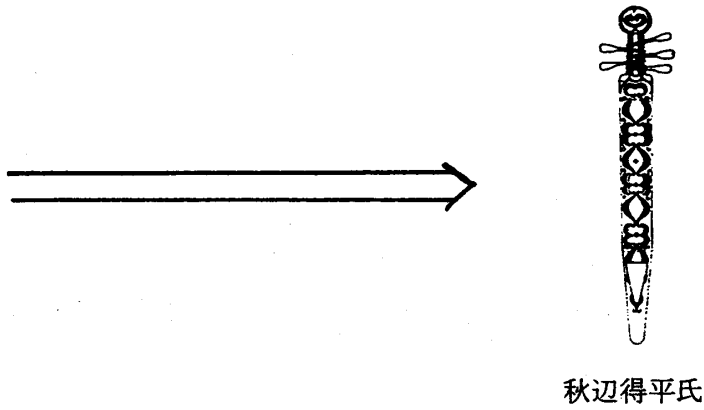
		*10月19日 T・C氏がトンコリ制作。網走郷土博収蔵(→北方民博1272)	8
		●10月19日 熊坂袋蔵氏トンコリ制作。網走郷土博収蔵(→北方民博1273)	8
1972	47	・12月2日 柳川助太郎氏 死去。	
1974	49	○3月19日 藤山ハル氏死去。	
1975	50	・春採と阿寒の古式舞踊が「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択され、調査が行われる。	44
		・7月 「オロッコの人権と文化を守る会」結成。	28
1976	51	・ビクター音楽産業株式会社からLPレコード『アイヌ・オロッコ・ギリヤークの芸能』(『日本の民俗音楽』別巻)を発売。監修・解説は本田安次氏・萱野茂氏。	
		・宇田川洋氏が東京大学北海文化研究常呂実習施設に赴任。	
1977	52	○3月31日 西平ウメ死去。(1901.6.12～、1902、03とも)	
1978	53	・LPレコード『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』東芝EMI発売。音源は1923の田辺尚雄氏による録音。	
		・8月 北方民族資料館ジャッカ・ドフニ会館。	28
1979	54	○LPレコード『トンコリ 滅びの五弦琴』CBS SONY 発売。白川八重子氏、金谷フサ氏らの演奏と演奏とインタビュー収録。	
		○10月 金谷フサ氏、白川八重子氏が「エイボン伝統芸術賞」受賞。	12
		○11月 東京池袋の青芸館バモスでゴットンとトンコリのリサイタルを開催。金谷夫妻と孫ら4人が出演し、トンコリとカチョを演奏。	
1980	55	○11月 金谷夫妻が常呂町教育・文化貢献賞を受賞。	道新1980.11.4
		●千家盛雄氏が『蝦夷嶋奇観』を参照して、トンコリ製作。	千家氏2003
		●杉村満氏がトンコリ製作。	千葉氏2003
		●藤谷憲幸氏がトンコリ製作。	藤谷氏2002
1981	56	●6月7日 灰場武雄死去(明治1906.1.25～)。	
1982	57	○網走郷土博物館にて『樺太アイヌの民族楽器トンコリの調べを聞く会』開催。金谷夫妻が演奏。	5
1983	58	●3月12日～13日 金谷栄二郎氏、網走郷土博物館主催の「トンコリ制作講習会」にてトンコリ制作指導。	6
		○11月19日 網走婦人会館において樺太アイヌとウイльтаの料理を試食をする会開催。金谷フサ氏、北川アイ子氏が講師を勤める。	7
1984	59	◎常呂町樺太アイヌ文化保存会結成。	36
		◎5月26日～28日日本民俗舞踊研究会が常呂町で舞踊の調査。	39
		・旭川、白老、平取、静内、浦河、帯広、春採、阿寒の8団体の舞踊が、国の重要無形民俗文化財に指定される。	
1985	60	●宇田川洋氏が金谷栄二郎氏の指導によりトンコリ制作。	14
		◎金谷夫妻、(財)アイヌ無形文化伝承保存会製作の記録映画『彫る・編む・奏でる』に出演。トンコリ製作と演奏を実演。	
		・2月7日～11 日本民俗舞踊研究会による樺太アイヌ古式舞踊調査。『昭和59年度文化財国庫補助事業調査報告書 カラフトアイヌ古式舞踊』作成。	

		●日本民俗舞踊研究会の調査に同行した黒岩俊生氏が、金谷氏の制作した資料をもとに自宅でトンコリ制作。	39
		・9月15日～20日 北海道大学で国際シンポジウム「B.ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」開催。金谷フサ氏が出席。	41
1986	61	◎3月 金谷栄二郎氏宇田川洋氏が『ところ文庫2 樺太アイヌのトンコリ』を著者 ●黒岩俊生氏が「民族楽器・トンコリ製作試論」を発表。 ○12月 金谷フサ氏死去。	
1987	62	○3月 北海道教育委員会から、金谷フサ氏の衣服製作に関する考察をまとめた『昭和61年度 アイヌ衣服調査報告書(Ⅱ)―樺太アイヌが伝承する衣文化1―』が刊行される。	
1988	63	●川村兼一氏ら旭川アイヌ語教室の有志4名が、金谷栄二郎氏を訪ねてトンコリ製作の講習を受ける。 ○3月 北海道教育委員会から『昭和62年度 アイヌ衣服調査報告書(Ⅲ)―樺太アイヌが伝承する衣文化2―』が刊行される。	川村氏2003
1989	平1	●3月～ 常呂町教育委員会の呼びかけにより、金谷氏が町内の有志6人を対象にトンコリ製作講習を行う。 ○3月 北海道教育委員会から『昭和63年度 アイヌ衣服調査報告書(Ⅳ)―樺太アイヌが伝承する衣文化3―』が刊行される。 ○6月 トンコリの完成を記念し、製作講習の参加者たちが演奏会を開く。演奏の指導は金谷氏と宇田川氏が行う。 ◎金谷栄二郎氏と宇田川洋氏が『ところ文庫5 樺太アイヌの板舟』を発表。	朝日89.4.19 朝日89.6.1
1990	2	●8月 釧路アイヌ民芸企業組合設立。アクセサリ類やトンコリ製作開始。	道新90.8.25
1992	3	○ 関東ウタリ会の八幡智子氏、横山仁美氏が富田歌萌氏のもとを訪ね、トンコリを習い始める。 ○キングレコードが『日本の伝統音楽／日本の民族音楽』(CD20枚組)を発売。このうち、DISC20『楽器玉手箱』に金谷栄二郎氏の演奏曲を2曲収録。 ○加納沖氏が川村兼一氏から、杉村氏のトンコリを譲り受ける。	会員各氏2003 加納氏2002、2003
	4	・千葉伸彦氏が「映像に見るトンコリ―藤山ハルの奏法について」(『ウェネウサラ』第10号所収)を発表。 ○11月 農村漁村文化協会が、金谷フサ氏の料理法についての聞き書きを収録した『日本の食生活全集48 聞き書 アイヌの食事』を出版。	
1994		・札幌、千歳、鶴川、門別、新冠、三石、様似、弟子屈、白糠の9団体の舞踊が、国の重要無形民俗文化財に指定される。	
1996	8	○千葉伸彦氏が「長嵐イソのトンコリ」発表(『北海道の文化68』所収)。 ○千葉伸彦氏が「藤山ハルのトンコリの演奏法について(1)」(常呂町樺太アイヌ文化保存会編『北海道東北部に残る樺太アイヌ文化Ⅰ』所収)発表。	
1998	10	●諏訪良光氏が、青山氏の作品を参考にトンコリを製作。 ●3月～4月 標茶町郷土館で諏訪良光氏青山俊生氏がトンコリ製作講習。 ●関東ウタリ会の会員らが東京国立博物館のトンコリを復元。	
2000	12	・6月 谷本一之氏が北海道大学図書刊行会から『アイヌ絵を聴く』を出版。	

トンコリ製作技術の流れ



凡例
 直接的な教示は⇒で、間接的な参照は➡で表す。製作時に参照した資料がある場合、監修者がいる場合は[]内に示した。



参考文献

アイヌ民族博物館

1996 『樺太アイヌ—児玉コレクション—』第 11 回特別展図録。1

青山(黒岩)俊生

1986 「民族楽器・トンコリ製作試論」『士別市立博物館報告』第 4 号。2

朝日新聞社

1968 『アサヒグラフ 6 月 28 日号』。3

網走市立郷土博物館友の会

1981 『モヨロ』№3。4

1982 『モヨロ』№9。5

1983 『モヨロ』№12。6

1983b 『モヨロ』№13。7

網走市立郷土博物館

1983 『収蔵資料目録—民族編—』。8

網走歴史の会 編

『網走市総合年表』 <http://okhotsk.vis.ne.jp/rekishi/> (2002 年 6 月参照)。9

阿部正巳 蒐集

1985 『アイヌ関係新聞記事 自明治二十年 至大正八年』アイヌ史資料集(第二期)第六卷阿部正巳文庫編(三)ノ五 河野本道 選 北海道出版企画センター。10

宇田川洋

1989 「北方地域の古代弦楽器試論—弓弭形製品の解釈—」『考古学と民族誌』渡辺仁教授古希記念論文集 六興出版。11

エイボン女性文化センター

1979 『1979 AVON AWARDS TO WOMEN 1979 年度エイボン女性年度賞』(授賞式パンフレット)。12

葛西猛千代

1975(1928) 『樺太土人研究資料』私家版。13

金谷栄二郎・宇田川洋

1986 「樺太アイヌのトンコリ」ところ文庫 2 常呂町郷土研究同好会。14

加納沖

1995 「トンコリを復元して」『音と映像による新世界民族音楽体系 解説書□』平凡社。15

樺太アイヌ史研究会編

1992 『対雁の碑』北海道出版企画センター。16

黒沢隆朝

1978 「このレコードに寄せて」『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(LPレコード)解説書 東芝 EMI。17

1994 『図解 世界楽器大事典』雄山閣出版。18

小泉文夫

1963(1978) 「消えていく楽器 トンコリ」『エスキモーの歌』青土社。19

1968(1978) 「愛の表現」『空想音楽大学』青土社。20

甲地理恵

2001 「小泉文夫記念資料室所蔵のアイヌ音楽録音資料」『民族音楽アーカイヴズにおけるマルチメディア・データベースに関する研究—音響を主体とするメディア統合をめざして—』平成 9 年度～平成 12

年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))(研究代表者柘植元一 東京藝術大学音楽学部)研究成果報告書。21

古原敏弘

2001「金城朝永日記(抄)」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号。22

近藤鏡二郎・富田歌萌

1963「アイヌの弦楽器“トンコリ”」『音楽学』第9巻 音楽学会。23

更科源蔵

1960『紋別市史』年紋別市史編纂委員会発行。24

1962「コタン探訪帳16」弟子屈町立図書館所蔵。25

ウイльта協会

1980『北方民族資料館ジャッカドフニ展示作品集』。26

田中了

1976「□ オロッコの人権と文化—「守る会」運動と今後の課題」『アイヌ・オロッコの問題と教育』北海道歴史教育者協議会編。27

2002「北方民族資料館ジャッカ・ドフニのあゆみ」『北方民族資料館ジャッカドフニ展示作品集(改訂版)』ウイльта協会。28

田中了 D・ゲンダーヌ

1978『ゲンダーヌ ある北方少数民族のドラマ』徳間書店。29

田辺尚雄

1927『島国の唄と踊』磯部甲陽堂。30

千葉伸彦

1992「映像に見るトンコリ—藤山ハルの奏法について」『ウェネウサラ』第10号 私家版。31

1996「長嵐イソのトンコリ」『北海道の文化』 北海道文化財保護協会。32

知里真志保・小田邦雄

1956『ユーカラ鑑賞』元々社。33

鳥居龍蔵写真資料研究会編

1990『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影 写真資料カタログ 第4部写真 満州 千島 沖縄 西南中国』東京大学総合研究資料館。34

常呂町

1995『ところ通信』Vol.6。35

常呂町樺太アイヌ文化保存会編

1996『北海道東北部に残る樺太アイヌ文化□』。36

富田歌萌

1968「アイヌの弦楽器“トンコリ”」『北海道の文化10』北海道文化財保護協会。37

1998『トンコリ』歴史教育者協議会第50回東京大会 講演資料。38

日本民族舞踊研究会編

1985『カラフトアイヌ古式舞踊』。39

萩中美枝

1984「常呂からのレポート(一)」『北海道の文化』50 北海道文化財保護協会。40

1986「常呂からのレポート(三)オイナーその二」『北海道の文化』54 北海道文化財保護協会。41

藤本英夫

- 1970 『天才アイヌ人学者の生涯』講談社。42
- 北海道教育委員会
- 1997 『アイヌのくらしと言葉 5』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 10。43
- 本田安次
- 2000 「アイヌの藝能」『本田安次著作集』第二十巻 錦正社。44
- 本田優子
- 1997 『二つの風の谷 アイヌコタンでの日々』筑摩書房。45
- 増田又喜
- 1996 『アイヌ歌謡を尋ねて』近代文芸社。46
- 松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説
- 1985(1858) 「西部登古呂誌坤」『戊午東西山川地理日誌』中、北海道出版企画センター。47
- 松浦武四郎
- 1969(1912~1914) 「近世蝦夷人物誌」『日本庶民生活史料集成』第四巻、山一書房。48
- 村崎恭子
- 1976 『樺太アイヌ語』国書刊行会。49
- 明治記念拓殖博覧会編
- 1913 『明治記念拓殖博覧会報告』。50
- 紋別市郷土史研究会
- 1969 『紋別市郷土史研究会会報』№5。51
- 横山孝雄(編)
- 1995 『アイヌ民族写真・絵画集成Ⅱ 民具』日本図書センター。52
- 米原ふさ子
- 1977 「西平ウメさんの思い出」『紋別郷土史研究会会報』№35 紋別郷土史研究会。53
- 米村美登里
- 1985 『モヨロ悠遠』北海道出版企画センター。54
- Kirsuten Yumiko Taguchi
- 1974 『An annotated Catalogue of Ainu Material』 SCANDINAVIAN INSTITUTE OF ASIAN STUDIES MONOGRAPH SERIES №20 printed in sweden studentlitteratur. 55
- William W.Fitzhugh and Chisato O. Dubreuil 編
- 1999 『AINU Spirit of a Northern People』Arctic Studies Center,National Museum of Natural History,Smithsonian Institution. 56
- Б.А.Жеребцов
- 1988 Материалы ищледбаиний Б.А.Жеребцова по жтнографии айноб Южного Сахалина Н.Арутюев .ed 57
- 音声・映像資料
- 日本放送協会
- 1964 『北方民族の楽器』(記録映画) 更科源蔵 監修。58
- ビクター音楽産業株式会社
- 1976 『アイヌ・オロッコ・ギリヤークの芸能』『日本の民俗音楽』別巻(LPレコード) 本田安次・萱野茂 監修・解説。59

(きたはら じろうた・千葉大学社会文化科学研究科)